ダンスの昇華、響きの多彩
～オーケストラ音楽で楽しむ舞曲の地域性～

山野雄大

仮面舞踏会の風景（エンドラー／喜多尾・新井訳『ヨハン・シュトラウス』［音楽之友社］所収）

同じ「ワルツ」でも多種多様

音楽から「歌と踊り」を抜いたら、ずいぶん淋しい世界になるだろう。そもそもクラシック音楽も源流をたどってみれば、民俗音楽の豊かな世界から精髄を磨き、美しいメロディや心揺さぶるリズムの多彩をどんどん取り込んでゆくことで芸術性の沃野（よくや）を広げてきた。たとえばオペラやバレエ、交響曲や管弦楽曲の豊穣（ほうじょう）に、どれほど「民俗舞曲」のエッセンスが溶け込んでいるか……ともすれば気づかないくらい自然なその融合に注目してみると、愉楽の色もまた深く見えてくるものだ。

たとえば「ワルツ」。19世紀後半に市民のあいだで爆発的な流行を生んだワルツの源流をたどれば、オーストリアや南ドイツなどで踊られていた「レントラー」という民俗舞曲だ。モーツァルトやベートーヴェン、シューベルトもレントラー舞曲を書いているが、後のブルックナーやマーラーの交響曲にも、それぞれの語法の中に取り込まれたレントラー舞曲が登場しているので、ワルツよりも朴訥（ぼくとつ）な香りを持った田舎踊りの色合いを「あれか」と思い出されるかたも多かろう。

レントラー舞曲はやがて街へ……男女ひと組で身体を寄せ合いながら回転して踊るワルツは、舞踏会だけでなくオペレッタにもその魅力を華ひらかせてゆく。それはやがて、リヒャルト・シュトラウスのオペラに薫り立つワルツの豪奢（ごうしゃ）……はたまたフランスの作曲家ラヴェルが古き良きウィンナ・ワルツへの憧憬を独特のシニカルな視線も込めて描いた舞踊詩〈ラ・ヴァルス〉など、大オーケストラを緻密壮大に織り上げた作品へと道を拓いてゆく。

ワルツのステップ（"A Description of the Correct Method of Walzing" London,1816 より）

こうした「聴くための」ワルツといえば、パリ社交界を中心に活躍したショパンがピアノのために書いた数多くのワルツは実用的な舞曲とは別世界、繊細華麗を極めた「踊れないワルツ」だ。

逆に、舞踊芸術たるバレエには古くからワルツが盛んに採り入れられていた。バレエダンサーの洗練を「観る」ものとして発展してゆくわけだが、9月定期でもお聴きいただくチャイコフスキーはとりわけこれを得意としたひと。彼の三大バレエには必ず素敵なワルツが入っている。

ちなみに、ワルツと言われて多くのかたが真っ先に連想されるのは、いわゆる「ウィンナ・ワルツ」……3拍子の2拍目を少しつっかけるように軽く前倒し気味に弾き、3拍目との間隔を僅（わず）かに長めにとる独特のリズム感かも知れないが、これはどうやら20世紀に入ってから色濃くなった風習ともいわれていて、いわばウィーン風の〈訛（なま）り〉が磨かれ定着したもの。面白いことにチャイコフスキーなどロシアのワルツは、リズムの取り方が異なり、アクセント以外は普通に3拍をほぼ均等にとる演奏法で統一される慣習がある。同じワルツでも多種多彩、リズムのニュアンスの違いも音楽の色に影響を与えていること、お聴きになると納得されるはずだ。

チャイコフスキー（グローブ音楽辞典第2版所収）

民俗舞曲の多彩を呑み込む

ワルツに限らず、クラシック音楽では舞曲からコンサート・レパートリーへと変貌（へんぼう）を遂げたものが非常に多い。遡れば、J.S.バッハの〈イギリス組曲〉などには、ドイツ起源のアルマンド舞曲をはじめ、フランス起源の流麗なクーラント、スペイン起源のサラバン

ド、イギリス舞曲であるジーグのほか、当世風の舞曲も盛り込まれていた。土地の踊りが様式化されて宮廷舞曲となり、芸術音楽として取り込まれ……クラシック音楽の土壌は各地の民俗舞曲によって多彩な花を咲かせてきたわけだ。

さらに、自在な情感を歌い、表現の爛熟（らんじゅく）をおし広げてゆくロマン派以降になると、既に様式化された舞曲の「外側」への視線が強くあらわれてくる。ブラームス〈ハンガリー舞曲集〉のように、楽想のモデルとなったロマ楽団もブラームス作品の演奏を求められる羽目になったり、元祖が圧倒されてしまう現象すら起きてくるが、後輩ドヴォルザークの〈スラヴ舞曲集〉ではスラヴ諸民族の舞曲を広くカヴァー。ボヘミア舞曲「フリアント」で華々しくはじまり、元気な「ポルカ」やゆったり美しい「ソウセツカー」などのチェコ舞曲、ポーランド舞曲「マズルカ」や、スロヴァキア舞曲「オドメゼック」、哀愁あふれるウクライナ舞曲「ドゥムカ」など多種多様で見事だ。

ブラームス（グローブ音楽辞典第２版所収）

バレエ音楽に溢（あふ）れる異国への憧れ

しかしこうした昇華は、舞踊芸術たるバレエの歴史でも既に盛んだった。――バレエが宮廷の豪奢から貴族の社交界へ、やがて市民へと観客層を広げてゆくなかで、取り込まれた各国の舞曲各種もその幅を広げる。先述のチャイコフスキー〈白鳥の湖〉では、宮廷の舞踏会でハンガリー、ロシア、スペイン、イタリア、ポーランド……と各国の客人たちが数々の民俗舞踊を踊り、悲劇に塗りつぶされがちな舞台をぱっと鮮やかに魅せる。

バレエ音楽における民俗舞踊は、観客にとって遥かな異国の色と匂いを体感させてくれる素敵なスペクタクルでもあった。特にロマン派や国民楽派以降の時代にはエキゾチックな表現をより積極的に取り込んでいったが、主にフランスとロシアを中心に発達していた当時のバレエ芸術が、それ以外の地域の民俗舞踊を（必然的な物珍しさとして）取り込んでいったのは自然な流れでもあっただろう。

チャイコフスキー〈くるみ割り人形〉にアラビアや中国のイメージを模した音楽まで登場しているのは、当時のロシア音楽に頻出するオリエンタルな関心のひとつと言えるが（彼の後輩グラズノフのバレエ音楽〈ライモンダ〉では中東欧の民俗舞曲だけでなくアラビアやスペインなど地中海文化の薫りが巧みに翻案されている）、バレエで熱狂を呼ぶ「遥かな国の」民俗舞曲でも、とりわけスペインの舞曲は、他の諸国の舞曲とは違う存在感を放ってきた。

スペイン舞曲、その情熱と官能への憧れ

そもそもスペインは、地中海にも面しヨーロッパとアフリカの接するところにある地理的な条件もあって、古くから西ヨーロッパ諸国と相当異なる文化の多彩を抱えてきた。熱い生命力溢れるリズム、官能的な薫りと陰影を感じさせる色彩……中東欧には決してない独特の味わいに満ちたスペイン舞曲は、国力の衰退と比例してスペイン楽壇が長らく沈滞していたあいだ、むしろ他国の作曲家たちを強く惹きつけた。シャブリエ（9月は狂詩曲〈スペイン〉をお聴きいただく）をはじめビゼー、ドビュッシーやラヴェルなど隣国フランスの作曲家、さらに北国ロシアのグリンカやチャイコフスキー、リムスキー＝コルサコフらがスペインの眩しい多彩に魅せられて表現のパレットを大きく広げた（オーケストラ作品が多いのはその多彩への欲望ゆえか）。

アルベニス（グローブ音楽辞典第２版所収）

彼らを追うようにスペイン楽壇から現れた優れた作曲家たち――スペイン民俗舞曲の数々を優れたピアノ作品に昇華したアルベニス（9月にお聴きいただく〈イベリア〉はピアノ曲からのオーケストラ編曲版だ）やグラナドス、少し下の世代になるファリャ、トゥリーナ（9月は彼らがパリ留学で磨いたオーケストラ書法の精緻をお聴きいただく）といった天才たちが、自国の民俗舞曲を昇華した素晴らしい作品を生んでゆくわけだ。その色彩表現にフランス音楽からの影響がどのように反映しているかも、実演であれこれ味わってみていただきたい。

――舞曲の豊かな地域性が、作曲家たちを通して新たな様式を、あるいはさらなる独創をひらき……20世紀以降にはヨーロッパ以外の作曲家たちも素晴らしい豊穣を生むのだが、これはまたの機会に。

（やまの たけひろ・音楽／舞踊ライター）

心に残るクラシック

篠田節子 ——①

Setsuko Shinoda

わかる以前のおもしろさ

ブルックナー：交響曲 第3番

履き慣れないハイヒールで宵闇の中をひたすら下りた。

義理ある方の受賞パーティーを中座させてもらい、会場であるホテルから坂と階段を延々と下ったところにあるコンサートホールまでは十分ほどの距離だった。

ビールの酔いが回って、おそらく真っ赤な顔をしてあえぎながら後半プログラムの始まる直前に何とかたどり着き、シートに身を沈めた。だれかに挨拶したようだが覚えていない。

会場が暗くなり、冒頭にかすかな音で奏でられるテーマ、弦の下降音階に乗ってトランペットの音が流れてくると同時に覚醒した。

神秘的な旋律の背後に聞こえる弦の下降音階がどこか不穏な気分をかき立てる。ゆったりと姿を現す音の大伽藍。ときに壮麗、ときにのどか。表現しがたい心地良さは、繰り返されるリズムによるものか、耳馴染みの良い旋律によるものか。

酔ってコンサート会場に入ったことは幾度かある。メンデルスゾーンの交響曲第4番〈イタリア〉を聴きながら舞台上に他の演奏団体の幻を見たのは不可思議な体験だったが、マーラーのときには素直に寝た。あまり良くない夢を見た。

たとえ素面であっても、幾度か音盤で聴いた曲ならともかく、初めて聴く長大な交響曲では、たいていは展開部でふと心が音から離れる。

終バスの時刻に間に合うかな、そういえばお腹空いたな、あ、長編のアイデア思いついた……。

ところが初めて聴くブルックナーの交響曲第3番では、まったくそんな瞬間がない。やってくる波に心地良く乗ったまま、光の隘路をどこまでも運ばれていく。

高みに上り詰めた直後、不意に訪れる沈黙。完全な無音の中、舞台の明るさだけが目を射る。休符も音楽とはわかっているけれど、これほどに印象的な沈黙を私は知らない。

そしてヴァイオリンで奏でられる旋律に呼応する低弦部の緊張感をはらんだ響きと意外なくらいに叙情的な美しさ。色彩に富んだ第三楽章でときおり見せる何ともいえないかわいらしい表情。そして第四楽章、すでに馴染んだ第一主題で巨大な円環は閉じられた。

ブルックナー／交響曲第3番〈ワーグナー〉（2016年6月24日、第559回定期演奏会）©読響

高揚した気分でふわふわと駅に戻り、電車の中で音楽仲間にメールを打つ。返信に目を疑う。

「ブルックナーの3番？ いくら聴いてもわからない曲だけど、どこがいいの？」

「そもそも何でその曲に興味を持ったの？」

そういえばブルックナーを好きという人は身辺に少ない。マーラーファンはいくらでもいて、それぞれ〈大地の歌〉や〈復活〉について熱く語ってくれたが、ブルックナーについては「途中で寝たが、目覚めたらまだ同じ三連符が続いていたので感動した」と皮肉る者がいるかと思えば、一言「耐えがたい！」。

専門家の方でも3番については「よく構成が掴めない」という感想を口にされる。

ふと、十代の最後の年に、さる著名な演劇研究者と彼のゼミ学生たちとともに『ゴドーを待ちながら』を見たときのことを思い出した。初めて目にする本格的な舞台と、難解で観念的な内容が、尻の青い女子学生にはぴたりとはまって、最後まで息を詰め、食い入るように舞台を見つめた。

終演後、興奮もさめやらぬまま「面白かったです！」と口走ったとたんに、件の研究者に鼻先で笑われた。「分かる以前の面白さ、かね」

あれから四十年が経ち、あらためて思う。分かる以前の面白さ、美しさ、おいしさが世の中にはたくさんあるから人生は楽しい。ボルドーワインからピナ・バウシュのダンス、エルンストの絵画、ブルックナーのシンフォニーまで。

profile しのだ・せつこ

東京都生まれ。作家。1997年『女たちのジハード』で直木賞受賞。自らチェロをたしなみ、『ハルモニア』『讃歌』など音楽を題材に取った作品も多い。近作に『インドクリスタル』（中央公論文芸賞受賞）。

◎首席オーボエ奏者

辻 功

Isao Tsuji

木管の音色に神経を使う 音が溶けた時、幸せを感じます

≪読売日本交響楽団の名誉指揮者ロジェストヴェンスキーさんが９月、４年ぶりに読響を指揮します≫

ロジェストヴェンスキーさんとの出会いは、読響にエキストラ（賛助出演）として出演した30年近く前です。チャイコフスキーの交響曲でしたが、上下3センチほどの幅で動いていた指揮棒が、6センチになるとぱっと音が変わる。指揮棒のわずかな違いで音の表情が一変した。ショックでしたね。

ロジェヴェンさんは一言で言うと、魔術師。テミルカーノフさんとも共通しています。タクトもそうですが、練習にまったく無駄がない。自分のやりたいことをやって、ハイ終わり。いい演奏ではなく、意味のある演奏をしようとしていると感じます。

彼は長いタクトを使っていましたが、年々短くなった。なぜ？と聞くと、「先が折れて短くなった」。リハーサルではジョーク連発で面白い人です。

≪チャイコフスキーの〈白鳥の湖〉には有名な旋律が出てきます≫

「白鳥」の旋律は、学校コンサートでの楽器紹介の時も含め、百何十回も演奏しました。でも、だれもがその印象を自分の中で作り上げているだけに難しい。バレエ音楽は、オペラと違ってオーケストラに休みがないから、目立たなくてもずっと吹いています。体力的に辛い面もあるんです。

ロジェヴェンさんといえば、ショスタコーヴィチのプログラム（26日）も興味深い。スターリン時代、自分の意見を言えない体制を経験した作曲家ならではの凄味（すごみ）を曲に感じます。奥様のピアニスト、ポストニコワさんと協奏曲で共演するのもおなじみですね。

≪辻さんは東京生まれ。父はＮ響のオーボエ奏者、母は日本では女性初のオーボエ専攻の奏者という音楽一家。幼少時から音感教育を受けました≫

まず2歳から3歳までヴァイオリンを習ったのですが、音程が悪いのを楽器のせいにしてやめてしまい、ピアノにしました。ところが、上手くならず、これも嫌だと。それなら家にあるオーボエを吹いたらどう？ と言われて乗り換えたんです。当時小学生でオーボエをやる子はいなかったから、ずっと1番でした（笑）。芸大附属高ではロックにのめりこみ、バンドでサックスを吹いたこともあります。レッド・ツェッペリン、ピンク・フロイドとか好きだったなあ。

≪芸大卒業後、ドイツに留学。第１回国際オーボエコンクールで２位になるなど５年間欧州で活躍し、92年に読響に入団しました≫

大学時代、自分は何をしたいのかわからなくなった時があったのですが、ドイツ・バッハ・ゾリステンの指揮者でオーボエ奏者でもあるヴィンシャーマンさんの演奏を聴き、ああ、この人しかいないと思った。これこそ僕の求めていた音楽で、彼に学ぼうと留学を決めました。技術的なことよりも、音楽、文化の根源的なことを学びました。帰国後、のびのびしていて、みんなが自由にソロを吹ける雰囲気の読響に惹（ひ）かれ、オーディションを受けました。

≪オーボエという楽器はとてもいい音がしますが、演奏は難しそうです≫

初心者は音を出すこと自体、難しい。体の中の圧力を高めて、息を圧縮して吹きます。音域は狭く、2オクターブ半しか出ません。フルートやクラリネットのように機能的ではない。作曲家は、そんなオーボエを音の表情に使う。メロディはこの音色で表現したいと。

そのような音色を活かせるブラームスの交響曲第1番の第2楽章のソロは最高です。でも、シューベルトの〈未完成〉の冒頭や、ブルックナーの交響曲のフルート、クラリネットと一緒に吹く場面はさらに素晴らしい。このような木管のメロディには、最も神経を使います。他の楽器と音が溶けなければならないから。自分のペースで倍音を出すと、音は溶けません。音色は倍音の含まれ方で決まります。振動しているリードを唇で周りから優しく包み込んで上の倍音が出ないようにすると、細かい振動がなくなる。上の高い倍音がなくなると、フルートやクラリネットと合いやすくなる。音が溶けて何の楽器が鳴っているのかわからないというのが僕の理想で、これが出来た時には本当に幸せです。

華麗に響く〈幻想交響曲〉。多摩公演だけの特別プログラム！

10/2（日）15:00　第3回 パルテノン名曲シリーズ　パルテノン多摩大ホール

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉
ビゼー：〈アルルの女〉第2組曲　ベルリオーズ：幻想交響曲
指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）

シルヴァン・カンブルラン

カンブルランが振る〈グレイト〉。ドイツの鬼才が共演！

10/8（土）14:00　第192回 土曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

10/9（日）14:00　第192回 日曜マチネーシリーズ　東京芸術劇場コンサートホール

10/10（月・祝）14:00　第91回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ　横浜みなとみらいホール

ラモー：〈カストールとポリュックス〉組曲
モーツァルト：ピアノ協奏曲 第15番
シューベルト：交響曲 第8番〈グレイト〉
指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
ピアノ：**マルティン・シュタットフェルト**

シルヴァン・カンブルラン

マルティン・シュタットフェルト

気品に満ちた美の世界！ 名匠が指揮する《珠玉の名曲選》

10/14（金）19:00　第597回 名曲シリーズ　サントリーホール

シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉序曲　ベルリオーズ：夏の夜
シューベルト：劇音楽〈ロザムンデ〉から“間奏曲 第3番”、“バレエ音楽 第2番”
ベートーヴェン：交響曲 第8番
指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
メゾ・ソプラノ：**カレン・カーギル**

※一部曲目が当初予定より変更されました。

カレン・カーギル

世界的ヴァイオリニスト Midori が二つの協奏曲を一挙披露

10/19（水）19:00　第563回 定期演奏会　サントリーホール　**完売**

シューベルト（ウェーベルン編）：6つのドイツ舞曲
コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲
J. M. シュタウト：ヴァイオリン協奏曲〈オスカー〉（日本初演）
デュティユー：交響曲第2番〈ル・ドゥーブル〉
指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
ヴァイオリン：**五嶋みどり**

五嶋みどり

10月 公演の聴きどころ

10月は全公演に常任指揮者**カンブルラン**が登場し、四つのプログラムを指揮する。2日は、カンブルランが《パルテノン名曲シリーズ》に待望の初登場。“色彩の魔術師”がフランス音楽を集め、多摩だけのオリジナル・プログラムを披露する。得意なベルリオーズの序曲〈ローマの謝肉祭〉でスタートし、ビゼーの〈アルルの女〉第2組曲では“メヌエット”“ファランドール”などのおなじみの旋律を、鮮やかな音色で響かせるだろう。後半は、ベルリオーズ自身の失恋体験をもとに作曲された〈幻想交響曲〉で、ドラマティックに盛り上げる。

8～10日は、フランス・バロック時代を代表する作曲家ラモーから古典派のモーツァルト、ロマン派のシューベルト〈グレイト〉へと進む凝った展開。時代様式を踏まえた多彩な切り口で、カンブルランが作品から新たな側面を引き出す。モーツァルトのピアノ協奏曲第15番では、J. S. バッハのCDで話題となり、欧州で注目を浴びるドイツの鬼才**シュタットフェルト**が共演。変化に富んだ鋭いタッチでモーツァルトの魅力に迫る。

14日の《名曲シリーズ》は、シューベルト〈ロザムンデ〉で前・後半とも始まり、ベートーヴェンの交響曲第8番をメインにしたプログラム。前半のベルリオーズ〈夏の夜〉では、メトロポリタン・オペラでのベルリオーズ作品で絶賛されたメゾ・ソプラノの**カーギル**が、素晴らしい歌声を聴かせてくれるだろう。

19日の《定期演奏会》は、世界的ヴァイオリニスト**五嶋みどり**を迎え、コルンゴルトとJ. M. シュタウトの協奏曲に取り組む。読響と五嶋の共演は12年ぶりとなる。ドイツの現代作曲家シュタウトがMidoriのために書き、2014年のルツェルン音楽祭で世界初演され話題を呼んだ協奏曲は、日本初演。また、フランスの著名な現代作曲家デュティユーの生誕100年を祝して交響曲第2番〈ル・ドゥーブル〉を最後に置く。大小2群の管弦楽による面白い編成が活躍するこの曲では、エスプリきらめく精妙な解釈を堪能したい。

（文責：事務局）

読響チケットWEB　検索

“カリスマ”上岡敏之と読響メンバーが繰り広げる白熱の室内楽

11/9（水）19:30　第12回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:15から解説　**完売**

上岡敏之

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》
シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉
ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲

ピアノ：**上岡敏之**
〔シューベルト〕
ヴァイオリン：**太田博子**
ヴィオラ：**三浦克之**
チェロ：**芝村 崇**
コントラバス：**小金丸章斗**
〔ショスタコーヴィチ〕
ヴァイオリン：**赤池瑞枝**
山田友子（首席代行）
ヴィオラ：**長岡晶子**
チェロ：**松葉春樹**

太田博子

三浦克之

芝村 崇

小金丸章斗

赤池瑞枝

山田友子

長岡晶子

松葉春樹

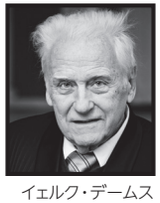
小林研一郎による《入魂のブラームス》。巨匠デームスが登場！

11/24（木）19:00　第564回 定期演奏会
サントリーホール

小林研一郎

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番
ブラームス：交響曲 第4番

指揮：**小林研一郎**（特別客演指揮者）
ピアノ：**イェルク・デームス**


イェルク・デームス

“炎のコバケン”が得意のチャイコフスキー作品で渾身のタクト！

12/2（金）19:00　第598回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/3（土）15:00　第4回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

松田華音

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
チャイコフスキー：交響曲 第4番

指揮：**小林研一郎**（特別客演指揮者）
ピアノ：**松田華音**

カエターニが振るロシア音楽。鬼才ポゴレリッチが注目の共演！

12/13（火）19:00　第565回 定期演奏会
サントリーホール

オレグ・カエターニ

ムソルグスキー（ショスタコーヴィチ編）：歌劇〈ホヴァンシチナ〉から
“ペルシャの女奴隷たちの踊り”
ボロディン：交響曲 第2番
ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番

指揮：**オレグ・カエターニ**
ピアノ：**イーヴォ・ポゴレリッチ**

イーヴォ・ポゴレリッチ

ドイツの名匠シュテンツが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17（土）14:00　第193回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/18（日）14:00　第92回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/20（火）19:00　FUJITSU Presents Concert
〈第九〉特別演奏会　サントリーホール

12/21（水）19:00　第599回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/22（木）19:00　第15回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール（大阪）

12/25（日）14:00　第193回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26（月）19:00　〈第九〉特別演奏会
東京オペラシティコンサートホール

マルクス・シュテンツ

アガ・ミコライ

清水華澄

デイヴィッド・
バット・フィリップ

妻屋秀和

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉
※12月20日公演はベートーヴェンの〈エグモント〉序曲も演奏します。

指揮：**マルクス・シュテンツ**
ソプラノ：**アガ・ミコライ**
メゾ・ソプラノ：**清水華澄**
テノール：**デイヴィッド・バット・フィリップ**
バス：**妻屋秀和**
合唱：**新国立劇場合唱団**
合唱指揮：**三澤洋史**

華麗なる新世界

■10/22（土）15:00　佐久市コスモホール（長野県佐久市）

■10/23（日）16:00　アイザック小杉文化ホール ラポール（富山県射水市）

指揮：藤岡幸夫　ヴァイオリン：木嶋真優

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲
メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク／交響曲 第9番〈新世界から〉

［料金］一般（前売り）¥2,500　高校生以下 ¥1,500（10/22）
一般（前売り）¥6,000　高校生以下（3階席）¥2,000（10/23）

［お問い合わせ］佐久市教育委員会文化振興課　0267-62-0671（10/22）
アイザック小杉文化ホール ラポール　0766-56-1515（10/23）

世界のマエストロシリーズ Vol. 4

■10/29（土）15:00　東京芸術劇場コンサートホール

指揮：ミシェル・プラッソン　メゾ・ソプラノ：鳥木弥生

ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲
サティ（ドビュッシー編）／2つのジムノペディ　ドビュッシー／海
フォーレ／〈ペレアスとメリザンド〉組曲　ラヴェル／古風なメヌエット、ボレロ

［料金］S ¥6,500　A ¥5,500　B ¥4,500　C ¥3,500　D ¥2,500
［お問い合わせ］東京芸術劇場ボックスオフィス　0570-010-296

NISSAY OPERA 2016〈後宮からの逃走〉

■11/11（金）18:30、11/12（土）14:00、11/13（日）14:00　日生劇場

指揮：川瀬賢太郎　演出：田尾下哲
出演：森谷真理、鈴木玲奈、宍戸開、鈴木准 ほか（11日、13日）
佐藤優子、湯浅ももこ、宍戸開、金山京介 ほか（12日）

モーツァルト／歌劇〈後宮からの逃走〉
（全3幕／ドイツ語歌唱・日本語台詞・日本語字幕付）

［料金］S ¥ 9,000　A ¥ 7,000　B ¥5,000
［お問い合わせ］日生劇場　03-3503-3111